市立 いちかわ 2-3月: (通巻 1985) 1985) 1985)

令和3年(2021年)

2021年度

あたりまえの風景に あたりまえの生き物に あたらしいときめきがある!



自然博物館収蔵写真

Р6 水源を探して川をたどる

Р6 展示室 飼育生物の話題 ヒトデの飼育

Ρ7 ♠ わたしの観察ノート 11~12月の記録

P8 🐡 ご案内

- ♠ いきもの写真館 P 1 タビラコ
- P 2 ♠ 市川市内の絶滅危惧種 - 絶滅危惧種がいる場所-4
- P 5 ※ いちかわの植物 30年 ミツバツチグリ フデリンドウ

博物館だよりはカラー版をホームページでご覧いただけます。

珍しいです。コオニタビラコは別名です。れています。春の田んぼで見られますが春の七草のホトケノザにあたると言わ

環境省レッドリスト 2020 より抽出

市川市内の絶滅危惧種

- 絶滅危惧種がいる場所 -

ここまで「環境省レッドリスト 2020」のリストから市川市域に生育・生息する種類を紹介してきました。今回は分類群ごとの種類ではなく、絶滅危惧種が生育・生息する場所について解説します。

(絶滅危惧の度合いの表記は、ローマ数字を算用数字に置き換えています)

絶滅危惧種という考え方は、「絶滅しそ うな種類を守る」というわかりやすい考え 方です。ですが実際の取り組みは複雑です。 日本は島国なので国内の野生生物の生息 圏を国の範囲内で扱える場合が多いです が、大陸のようにいくつもの国が陸続きに なっていると、ある種の生息圏は複数の国 にまたがってしまいます。その場合に、そ れぞれの国が自国内だけで対応しても保 護の効果は高まりません。生物の生息圏は、 山脈、大河、海といった自然の要因によっ て決まっています。渡り鳥や海洋生物のよ うに地球規模の広がりを持つ場合もあり ます。野生生物を保護するためには国境の ような人為的な境界線で区切るのではな く、それぞれの種類に固有の生息圏に合わ せて国際的に取り組む必要があります。

一方、市川市域に目を転じると別の状況があります。東京23区に隣接する市川市域は全面的に都市の環境です。人工的に作られた環境が広がり、その隙間に自然環境が残されています。都市環境によって自然環境が囲い込まれた状況です。この中でタヌキやカラスは自身の暮らしを都市化させ、都市に分布を広げています。ですが囲い込まれた自然環境の中だけで生き、そこに取り残されている種類も多くあります。市域に生育・生息する絶滅危惧種の動植物

は、そういう存在です。この場合、市川市域という境界線すら、意味をなさないものになります。もっと狭い範囲、隙間に残るわずかな自然環境が生活圏のすべてだからです。

仮に市川市版レッドリストとして種類をリストアップしても、実際はそれらの種類はわずかに残る自然環境の場所に集中します。ですから、個々の種にこだわるよりも、いま残る自然環境をひとまとまりのものとして保全した方が、結果的に多くの絶滅危惧種を保護することになります。

今回は、市川市域において多くの絶滅危 惧種が生育、生息する場所を紹介します。 どの場所も社会活動の影響を受けざるを えず、自然環境としては青息吐息の状況で す。まず、それらの場所を保全し、その上 で個々の絶滅危惧種に必要な環境を維持 したり創出したりする対応が必要です。

ただ、絶滅危惧種どうしで必要とする環境が相容れない場合もあります。たとえば江戸川のヒヌマイトトンボとミズアオイです。ミズアオイの群落を維持すればヒヌマイトトンボが生息できるヨシ原が成り立たないからです。狭く限られた範囲ではどちらかを選択せざるを得ません。狭くなるほど、選択肢は限定されます。

市川市域で絶滅危惧種が多い場所

おもな種類を挙げました。

●長田谷津 (大町公園内の自然観察園)

湧き水が豊富な谷津の環境です。

ホトケドジョウ(魚類:絶滅危惧1B類)

スナヤツメ(魚類:絶滅危惧2類)

ドジョウ(魚類:準絶滅危惧)

コオイムシ(昆虫:準絶滅危惧)

ネアカヨシヤンマ(昆虫:準絶滅危惧)

※昨年、産卵を写真撮影された方がいます

マシジミ(貝類:絶滅危惧2類)

キンラン(植物:絶滅危惧2類)

マヤラン(植物:絶滅危惧2類)

カワヂシャ(植物:準絶滅危惧)

そのほか林や谷津を利用する鳥類があります。たとえばオオタカ(鳥類:準絶滅危惧)です。

●江戸川放水路と行徳近郊緑地特別保全地区

東京湾の干潟と浅瀬です。

マサゴハゼ(魚類:絶滅危惧2類)

トビハゼ(魚類:準絶滅危惧)

キイロホソゴミムシ(昆虫:絶滅危惧1B類)

ギョウトクコミズギワゴミムシ(昆虫:絶滅危惧2

類)

ハマベゴミムシ(昆虫:準絶滅危惧)

カワグチツボ(貝類:準絶滅危惧)

エドガワミズゴマツボ(ウミゴマツボ)(貝類:準

絶滅危惧)

ウネナシトマヤガイ(貝類:準絶滅危惧)

オオノガイ(貝類:準絶滅危惧)

ガタヅキ(コハギガイ)(貝類:情報不足)

ウラギク(植物:準絶滅危惧)

そのほか干潟や浅瀬を利用する鳥類があります。たとえばコアジサシ(鳥類:絶滅危惧2類)です。

●江戸川

東京湾と利根川という大きな2つの水系 をつないでいます。一部に自然が残る河川 敷があります。

ニホンウナギ(魚類:絶滅危惧1B類)

ヒヌマイトトンボ(昆虫:絶滅危惧1B類)

ヤマトシジミ(貝類:準絶滅危惧)

ノカラマツ(植物:絶滅危惧2類)

ノウルシ(植物:準絶滅危惧)

フジバカマ(植物:準絶滅危惧)

カンエンガヤツリ(植物:絶滅危惧2類)

タコノアシ(植物:準絶滅危惧) ミズアオイ(植物:準絶滅危惧)

●内陸の水辺

市川市域には、まとまった面積の調節池、調整池、公園があります。

マルタニシ(貝類:絶滅危惧2類)

モノアラガイ(貝類:準絶滅危惧)

ジョウロウスゲ(植物:絶滅危惧2類)

オオアカバナ(植物:絶滅危惧2類)

ツツイトモ(植物:絶滅危惧2類)

そのほかおもに淡水の水辺を利用する 鳥類があります。たとえば**ヨシゴイ(鳥類:準 絶滅危惧)**です。

●北部の樹林

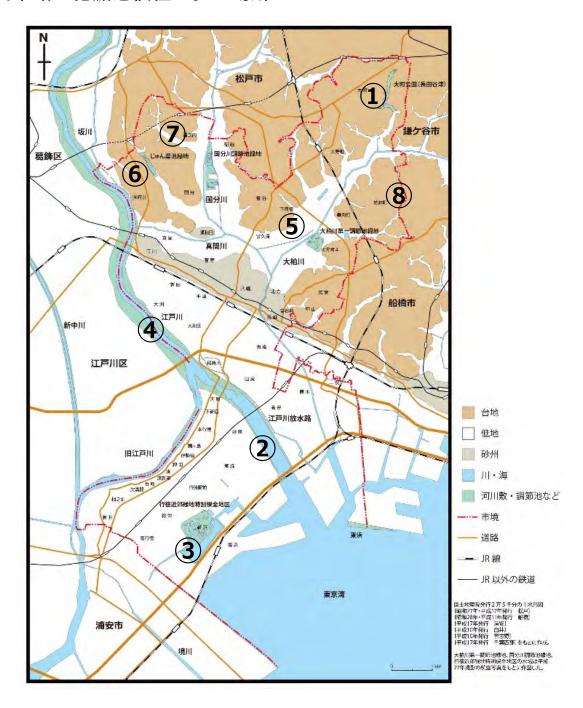
市川市域北部には、小さな樹林が点在しています。

イヌノフグリ(植物:絶滅危惧2類)

キンラン(植物:絶滅危惧2類)

マヤラン(植物:絶滅危惧2類)

市川市域で絶滅危惧種が多い場所



①:長田谷津

②:江戸川放水路

③:行徳近郊緑地特別保全地区

4): 江戸川

⑤:大柏川第一調節池緑地

⑥:じゅん菜池緑地

※イノカシラフラスコモ (絶滅危惧1類)が自生 ⑦:堀之内貝塚公園と小塚山公園

⑧:柏井緑地

いちかわの植物 30年

自然博物館の 30 年あまりの活動で得られた写真を用いて 市川市域の植物を紹介します。

ミツバツチグリ

いわゆる普通種が市川市域では珍しいというのは30年前からのことですが、珍しいのレベルを超えて最近では次々に姿を消しています。野草の多くは「何でもない場所」に生えますが、市域では「何でもない場所」が「何かある場所」へと姿を変えているからです。

ミツバツチグリは、ヘビイチゴに似た 黄色い花を咲かせる野草です。ちょっと した草原に普通に生え、郊外で自然観察



ミツバツチグリ(1987 年 4 月 17 日) 柏井町 同じ場所ではキジムシロも見つけた

を行う場合は新人さんが説明を担当するような種類です。写真は 1987(昭和 62) 年に柏井町で撮影しました。現在、市川市域で見られる場所があるのかは、わかりません。

フデリンドウ

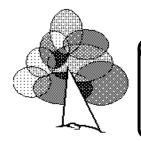
春の花は小さく、見落としてしまうことがよくあります。写真のフデリンドウは1986(昭和61)年に柏井町の雑木林のなかで見つけたものです。フデリンドウは明るい土手に群生しますが、この時は林内、しかもたったひと株しかありませんでした。貴重なひとコマとして大切にしていましたが、その後、市川霊園で群落を見つけました。フデリンドウが好む環境だったので毎年楽しめる、と思



フデリンドウ(1986 年 4 月 24 日) 柏井町 写真の株はかなり小さい

いましたが、なぜか数年後に消えてしまいました。掘られたとは思いたくないのですが、その可能性が高そうでした。

くすのきのあるバス通りから No.140



水源を探して川をたどる

暮れに、正月を迎えるにあたり、庭木はきれいに剪定され、空地の草も刈られ、最近になって、バス通りのクスノキの街路樹も強く剪定されて、こざっぱりしています。ロウバイは咲きコブシの蕾が見した。「草木も枯れ、見通しが良いかも…真間川流域とはどんなところかな?」と、2日にわたり歩いとなりました。市営霊園下を東に歩き出した。かました。市営霊園下を東に歩き出した。鎌ケ谷市がの子がの行近の谷戸が一つの水源のようです。ファイターズスタジアムの裏側では2mの厚さの関東ローム層が見られました。川の周囲は湿地が多いようです。東中沢の調節池を経て、「貝柄山いす。東中沢の調節池を経て、「貝柄山い

いがらやま)公園」の突き当りも水源のようです。鎌ケ谷松戸線(国道464号)に出ると「下総小金中野牧跡(捕込とっこめ)」がありました。次の日は、鎌ヶ谷駅から囃子水(はやしみず)に行きました。大きなハンノキ、池や七面堂への土の斜面がありました。道野辺の調節池を経て、中沢川に戻り、南へ二和川をたどりました。「鉄道連隊社で、路があります。遊水地を経て二和道付近に出ました。「鉄道連隊建設の橋脚」があるアカシア公園の先に水路が続いているようでした。船橋市の飛び地は台地で、細く曲がった市境、川の流域が鎌ケ谷市であることが歩いてわかりました。

(M. M.)

展示室 飼育生物の話題

ヒトデの飼育

お客さんからいただいたイトマキヒトデを展示しています。ガラス水槽で飼うと 写真のように裏側の触手の動きがよく見えて楽しいです。飼育も簡単で、スーパー で生きたアサリのパックを買って冷凍しておき、それを解凍して殻を開いて水槽に 落とすだけです。ヒトデはすぐに餌を見つけて、全身で包み込むようにして食べ始

めます。星型の中心が口になっています。

ただ、展示水槽には同じくアサリが大好物のショウサイフグもいるため、展示水槽ではヒトデは餌にありつけません。なので2匹を交互に展示とバックヤードで飼い、バックヤードの時だけ餌を与えます。1週間ごとの交代で、バックヤードの週は、全部で2~3個のアサリを与えています。





◆長田谷津より -

- ・もみじ山の入り口をマミチャジナイが鳴きながら飛び回っていました(11/4)。 秋の渡りの時期に長田谷津を通過するようです。昨年、一昨年も確認しています。
- ・小鳥たちが一斉に上空を警戒したので、 上空に目をやるとハイタカが旋回して いました(11/6)。長田谷津では秋から 冬に稀に見るとができるタカです。

以上 稲村優一(自然博物館)

- ・長田谷津に少しだけあるキッコウハグ マが咲いていました(11/10)。閉鎖花 のことが多いのですが、今回はよく開 いています。
- ・斜面林の中のジャノヒゲの株には、いくつも実がついていました(11/16)。 まだ熟していないので緑色です。熟す と美しい青色になります。
- ・エナガは、いつもこずえにいるイメージですが、ヨシ原に降りて枯れた茎を割っていました(11/26)。枯れたヨシの茎の中にいる虫やクモは、小鳥たちの大切な冬の食料です。なので、全部刈ってしまうことはありません。

以上 金子謙一(自然博物館)

- ・アカガシの葉にムラサキツバメが3頭 密集して止まっていました(11/28)。 ここ数年同じ木で越冬する姿が見られ ています。
- ・珍しく、クイナがいました(12/1)。三 角池の前の中央水路を下流側からみて 左から右に飛びました。
- ・大町門のすぐそばにある、カキの実を 、メジロが食べていました(12/4)。

- ・博物館のすぐ横の林の樹冠に、カワラ ヒワの30羽ほどの群れが止まっていま した(12/8)。双眼鏡で確認すると、外 見的特徴からおそらくカワラヒワの亜 種、オオカワラヒワのようでした。オ オカワラヒワは越冬のためにこの辺り にやってくる冬鳥です。
- ・試験的に水位を上げた大池(噴水池)に オオバンが1羽飛来しました(12/12)。 長田谷津では初めての記録です。
- ・朝からの大雨で人が少ない動物園入り口の広場で、シロハラが茂みから出てきて餌を探していました(12/17)。

以上 稲村優一

- ・湿地の埋まった部分を掘り起こして、水面を復元しています。作業の過程で、ツチイナゴが水面に落ちてしまいました(12/25)。ほかに、コバネイナゴもいました。土を掘ったところからはサワガニが出てきました。斜面ではなく谷底部分でサワガニが越冬していることの証拠です。
- ・完全閉園期間に入り、公園内に人影はありませんでした(12/28)。日中からタヌキが湿地のタヌキ道を歩き、中央水路沿いにも姿を現しました。人がいないと、タヌキも野鳥ものんびりしていました。

以上 金子謙一

穏やかな日が続き、紅葉のあたり年だったようで、きれいな秋でした。暖かい日が多くありましたが、年末には強力な寒気が入りました。

自然博物館のwebサイト(ホームページ)を 調べ学習や事前学習にご活用ください

自然博物館のwebサイト(ホームページ)では、つぎのような素材(コンテンツ)を ご用意しています。

〇 オリジナル動画

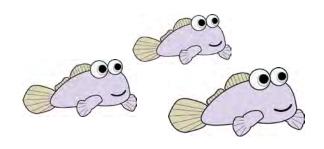
- ・グリーンスクールで訪れる大町公園の自然観察園(長田谷津)について、毎月の風景 や動植物を動画で紹介しています。
- ・同じく長田谷津について、タヌキやノウサギ、オオタカなど、一般の観察では見られ ない動物の生態を、センサーカメラで記録した動画で紹介しています。
- ・展示や、学校への出張授業で用いた教育普及用動画が見られ、順次増やしていきます。

〇 自然観察週報

自然博物館の学芸員の観察記録です。1998年からのデータを1年ごとにエクセルのファイルで提供しています。すべて市川市内の情報なので、子どもたちのタブレットにダウンロードして調べたい生き物を種名で絞り込んだり、長田谷津や江戸川放水路など場所で絞り込んだりすることができます。たとえば野鳥の「カシラダカ」で絞り込むと、長田谷津では2011年を最後に記録がありません。その原因をテーマに調べ学習を発展させるのもおもしろいと思います。

○ 自然博物館だより

自然博物館が隔月で発行している読み物です。市川市内の自然の話題を取り上げているほか、分類学や生態学の立場で自然や生き物を解説した記事もあります。最新号および創刊号までのバックナンバーをPDF形式のファイルで提供しています(ダウンロードできます。古い号は準備中です)。自然博物館が発行したものですから、書かれている内容についてお問い合わせいただくことも可能です。記事について子どもたちとメールでやりとりできれば楽しそうです。



第34巻 第5号 (通巻第198号) 令和4年2月1日 発行

編集·発行/市立市川自然博物館 (市川市教育委員会生涯学習部) 〒272-0801千葉県市川市大町284番地 **20**47(339)0477